

【報告】

## エンブレム研究の回顧と展望 ——第8回国際エンブレム会議に参加して——

松 田 美作子

2008年7月27日から8月2日まで、英国いにしえの都、ウィンチェスターにて Society for Emblem Studies (略称 SES) が3年ごとに開いている国際エンブレム会議、“Word and Image, 1500–1900: Figure, Form and Function”が催された。今回で8回を数えるこの会議に、30日のストーンヘンジやソールズベリーへのエクスカージョンをはさんだ後半部に参加した。また今秋、AMS Studies in the Emblem 第20巻として、エンブレム研究初の総括的コンパニオン、Peter M. Daly, ed. *Companion to Emblem Studies* (N.Y.: AMS Press) が出版された。この機会に、SESのこれまでの歩みやエンブレム研究の現況を概観し、展望を述べてみたい。

総勢180名ほどのこの小さな学会がわが国ではじめて紹介されたのは、『英語青年』誌上で、第2回大会の報告、“グラスゴー・エンブレム学会にて”(小田原瑤子氏、1991年2月)が掲載されたときであろう。同時期に、SES日本支部も10名ほどのルネサンス英文学研究者を中心にスタートした。SESは、大西洋をはさんでマッギル大学(カナダ)の Professor Peter M. Daly とストラスクライド大学(スコットランド)の Professor Michael Bath が中心となって活動を展開してきた。特にデイリー氏は、当初から今日に至るまで「エンブレム研究のチャンピオン」というべき存在で、この分野の発展は彼の履歴とともにあるとって過言ではない。1958年、ブリストル大学を卒業後、チューリヒ大学での博士論文であった *Emblem Theory: Recent German Contributions to the Characterisation of the Emblem Genre* (Nendeln: KYO) を1979年に刊行し、ドイツのエンブレム理論研究を刺激し、現在のドイツ語圏エンブレム研究の基を築く。同年、*Literature in the Light of the Emblem:*

*Structural Parallels between Literature and the Emblem in the Sixteenth and Seventeenth Centuries* (Toronto: Toronto UP) を出版、当時のシェイクスピアをはじめとする文学研究にエンブレムの観点を導入し、歴史的、理論的側面を補強した。本書は1998年に改訂版が出ており、ほとんどすべての分野において、近代初期芸術および文化におけるエンブレムの影響を問いつけている。1979年は、彼が Medieval Studies Congress (西ミシガン大学カラマズー校) において、毎年 Emblem Session を運営しはじめた年でもあり、以来北米におけるエンブレム研究者たちの交流の拠点となっている。1986年には Dan Russells らとエンブレム研究に特化した初の学術雑誌 *Emblematica* を AMS Press から発行、編集者として主導し、現在に至っている。また、トロント大学出版局から出ている Index Emblematicus シリーズの編集主幹としてエンブレムブックのリプリント版の刊行を主管してきた。エンブレムブックのリプリント版は、トロント大学出版局のみならず、いくつかあるが、彼がめざしたのは、アルチャーティのラテン語諸版間での同一モットーでも図版が異なる異版を比較できるように配列、相互索引を工夫し、まさに題名どおりエンブレムのインデックス化を図った点で、野心的なりプリント版となっている。トロント大学出版局からはさらに1997年より、イエズス会が刊行した膨大なエンブレム・テキストのシリーズ、Corpus Librorum Emblematum: The Jesuit Series が刊行中であり、このシリーズによって、人文主義的なエンブレムブックに比較して研究の裾野が狭かった宗教的エンブレムの研究が飛躍的に増加したように思われる。こうしたリプリン版やすべてのエンブレムブックスのマイクロフィルム化を目指す IDC [Inter Documentation Company (Leiden, the Netherlands)] をはじめとするマイクロフィッシュ・コレクションは、何にもましてエンブレム研究の裾野の拡大と普及に寄与したが、エンブレムブックもまた、時代のデジタル技術の発展と無縁ではいられなかった。最も早くからデジタル化問題に取り組んできた一人、Alan R. Young (アカディア大学) を中心にして、今回の会議でも、エンブレムのデジタル化はひとつのセッションを占め、印刷版と比べた場合のデジタル版の優劣や新しいデジタル化計画など披露された。まとまったデジタル化としては、英語版エンブレムブックスは EEBO (Early English Books Online)、ドイツ語版エンブレムブックスはイリノイ大学図書館、スペイン語版は

Sagrario López Poza 率いる Grupo de Investigación sobre Literatura Emblemática Hispanica のもとで行われているが、現在ミュンヘン大学そのほか多くの大学にてさらに進行中である。この分野の基本的な情報は、Peter M. Daly, *Digitizing the European Emblem: Issues and Prospects* (N.Y.: AMS Press, 2002) を参照されたい。

北米においてエンブレム研究が充実する中、グラスゴーではバース氏を中心にエンブレム研究グループが形成され、1987年、ヨーロッパ各国からの参加者を集めカンファレンスを開催した。これを核にして以後3年おきにエンブレム研究の国際会議が開催されるようになり、現在に至っている。バース氏もまた、シェイクスピアを中心とした文学作品におけるエンブレム的なモチーフを追跡した諸論考をまとめ、*The Image of the Stag: Iconographic Themes in Western Art* (Baden-Baden: Verlag Valentin Koerner, 1992) を刊行、モチーフの受容と変容を明らかにすることで、エンブレムが同時代の芸術に及ぼした広範囲の影響を検証した。同時に、彼は積極的にスコットランドやイングランドに現存するエンブレムの応用表現の発掘と分析に努めてきた。各地のマナーハウスや教会に残る絵画、メモリアル・グラス、家具、タペストリー、メダル、コイン、食器などの日用品、室内調度品にほどこされた刺繍、宝飾品などにはエンブレムそのもの、あるいはエンブレムを応用した表現や装飾がほどこされているのである。もっとも早い研究例としては、スコットランドのスターリングやファイフなどの教会や修道院に残る17世紀の墓石に、クォールズのエンブレム集から採ったエンブレムが刻まれていることを実証している。[Michael Bath and Betty Willsher, “Emblems from Quarles on Scottish Gravestones” in Alison Adams ed., *Emblem and Art History* (Glasgow: Glasgow Emblem Studies, 1996) を参照。]

本会議では、シェイクスピアやスターン、コルネイユにおけるエンブレムに由来する表現の研究もみられたが、そうした文学作品との関連に絞った発表より群を抜いていたのは、文学以外の分野との関連におけるエンブレム研究であった。最近注目されているのは、ヨアヒム・カメラリウスの動植物を中心とした全4巻からなる博物学的エンブレムブックが、後世の博物学の書物に与えた影響を検証するものである。アルチャーティのエンブレムにおいてもプリニウスを参照した記述がみられるが、*Historia Animalium* を著した近代のプリニウスとも称しうるコン

ラート・ゲスナー (Conrad Gessner) をみても、欄外注にエンブレムブックからの記述が入っている。そうした前近代的な情報は時代が下がるにつれて無視され、純粋な自然科学的に認められた情報だけが掲載されるようになる過程を、鳥類の図鑑の歴史をたどりながら示した複数の発表があり、これら博物学の発展途上にあるエンブレム (ブック) を、エンブレムのジャンルに入れるのか入れないのかという議論があった。ここではこうしたエンブレムブック中の博物学的エンブレムを 'placemaker' つまり移行期にある中間的なものとして捉えることが提案された。また、16, 17世紀の本の表紙に用いられた刺繍についての発表があり、これはバース氏がスコットランドのメアリー女王や彼女にまつわるハードウィックのベスの刺繍作品にみられる動植物の図案の元がゲスナーであったことをつきとめた最新の労作、*Emblems for a Queen: The Needlework of Mary Queen of Scots* (London: Archetype Publications, 2008) の成果とも重なる。エンブレムの定義自体を疑い、エンブレム構成は3部位そろって1つと考えることの妥当性をめぐる理論についての議論はいまでも続いている。しかしバース氏の一番弟子である John Manning がその主著、*The Emblem* (London: Reaktion Books, 2002) の冒頭で述べているように、エンブレムをひとつの独立したジャンルとしてではなく、いろいろなジャンルと関連づけることができる一形態と考え、まず第一に視覚芸術と言語芸術の結びつきという起点から捉えて、エンブレムを応用した表現を広く探求する方向に進んでいるのが現在の趨勢であろう。

もうひとつの今会議の特徴は、エンブレム研究が欧米以外の世界に広がりつつあるということである。アフリカ、南米、さらに日本におけるエンブレムの受容と変容に関する発表がみられた。特に伊藤博明氏の "Reception of Dutch Emblems in Japan: Shiba Kokan (1747-1818) and Jan Luyken's *Het Menselyk Bedryf*" は、本格的な江漢とオランダ趣味との関連を考察する興味深い発表であった。ここでもイソップ物語などでわが国で受容されていた絵草紙本との比較など、エンブレムが広くいきわたっていた他のジャンルの本とどのような影響関係にあるのか考えなおす視座が提供された。日本の近代美術史において、いまだ十分解明されていない部分であると思われる。

デイリー氏が今会議で行った基調スピーチにおいて、1980年代以降の

エンブレム研究を一言で“marginalisation of emblems”と喝破し、ちょうど18世紀英国において、エンブレムブックが挿絵の入った子供向けの本というジャンルでくくられ、ソング・ブックやチャップ・ブックの類と同列にみなされて、このジャンルに対する適正な理解を欠いていたように、エンブレム研究がたとえばモチーフの変遷の追跡などの伝統的なディシプリンを懐疑することによって、かえってエンブレムが図絵とテキスト、あるいはライター、彫版師そして出版業者のコラボレーションであるという根本、エンブレムを解釈することとはそれらの関わりを明らかにするプロセスであることを軽んじる傾向に警鐘をならした。そしてあらゆる人文系学問領域におけると同様、エンブレム研究もまた、“historisizing and contextualising”、歴史的な文脈においてエンブレムを捉えなおす作業と無縁ではいられないこと、そのために今後、歴史的かつ真にクリティカルなエンブレムブックのテキストの出現がまたれることを強調した。

今秋、AMS Press より出版されたエンブレム研究のコンパニオンは、600ページを超える大部なものである。残念ながらアジア地域に関するエンブレムの項目はないのだが、執筆者のほとんどがデイリー、バース両氏の薫陶を受けた世代の研究者であることを思うとき、エンブレム研究は、デイリー、バース両氏ら創成期のメンバーから次の世代へと着実に引き継がれていることを実感した。わが国においても2000年、ありな書房よりアルチャーティの翻訳が出版された（伊藤博明訳、アンドレア・アルチャーティ『エンブレム集』）。少しずつではあるがこの分野の研究が深まる機運が整いつつある。SES 日本支部にも西洋美術史の研究者をはじめ、英文学以外の専門家の入会が続き、今秋「エンブレム研究会」を立ち上げることができた。図像と詩文の協同というバイメディアルな特徴を生かして、さまざまな領域の研究と結びつくような新たな活動を展開したいと考えている。